

**ZAP!**

**内容見本**

**萌えぎのエレン**

# 目次

はじめに .....	3
デザインズ 6 .....	5
スーパーロボット ZAP (イントロダクション) .....	7
GTM の感情 .....	8
映画『花の詩女』ブルーレイはいつの日か .....	10
13 巻以降の洗練 .....	13
ファイブスター物語を終わらせる計画はあるのか .....	16
あとがき .....	18

# はじめに

永野護の漫画、ファイブスター物語。2013年に連載を再開して、登場するロボットをモーターヘッドからゴティックメードに変更したのだが、以降の連載は、これまでと比べて一直線に突き進んでいる印象だ。そのことについて、色々と考えてみた。

この個人誌は、2014年に初めて出したファイブスター物語エッセイ『NAGANO!』の続編になる。5年もたったのだから書きたいことがたまっているはずだったが、いざ書いてみると、単行本14巻に収録されたベラ攻防戦のここが良かったなど、そういうことは、全く書けなかった。

それで、今回は、ファイブスター物語について、それほど知らない方々に読んで頂ければ良いのではないかと考えて、この5年間にぼくが感じたことの中から印象的なトピックについて書いてみた。一応、ファイブスター物語の熱心なファンが読んでも面白いと感じて欲しいので、それなりに頑張って書いてみました。よろしくお祈いします。

以下、本文にて使用する略語または用語について。

## GTM

- ・ゴティックメード
- ・ファイブスター物語に登場するロボット兵器

## 花の詩女<sup>うため</sup>

- ・永野護監督アニメ映画『花の詩女 ゴティックメード』
- ・GTM 初登場
- ・後にファイブスター物語の映画であることを公表

## モーターヘッド

- ・ファイブスター物語に登場するロボット兵器
- ・花の詩女公開後に刊行されたファイブスター物語単行本13巻からGTMに全設定変更(入れ替え)
- ・今後この漫画にモーターヘッドは登場しない

## ロボット

- ・特に断りがない場合GTMやモーターヘッドを指す

## 星団

- ・ジョーカー太陽星団

- ・ファイブスター物語の登場人物が暮らす世界
- ・太古の人体改造の影響により騎士（GTM を操縦することが出来る特殊な人間）として生まれる者が居る
- ・断片的にしか描かれていないがジョーカー太陽星団の外の宇宙も存在している

## ファティマ

- ・GTM コントロールをサポートするために生み出された人工生命体
- ・機械の身体では無く骨や肉は人間と同じだが加齢せず寿命も人間よりも長い
- ・ほとんどが若い女性として作られる
- ・騎士とファティマが居ないと GTM は動かない
- ・定期的で開催されるお披露目などで騎士はファティマを娶るが選ぶ権利はファティマ側にある（騎士がファティマを選ぶことは出来ない）
- ・ファティマの開発と育成は特殊な才能を持つ天才技術者のみが行う

## アマテラス

- ・天照の帝（あまてらすのみかど）と呼ばれることが多い
- ・ファイブスター物語の主人公
- ・天照家皇帝（84 代目）
- ・デルタ・バルン星の統治者であり極めて冷静な政治力で治める
- ・デルタ・バルン星全ての土地の所有者でもあり借地権などの莫大な収入を得ている
- ・騎士としてトップクラスの強さを誇る
- ・騎士団（GTM の軍隊）は国家が運営するものだがアマテラスは莫大な資産により個人でミラージュ騎士団を所有する
- ・ミラージュ騎士団 GTM の開発設計も行う（ファティマ同様 GTM は特殊な才能が無ければ設計することが出来ない）
- ・不老不死であり永遠の若さを保つ
- ・仮の姿であるロボット整備士レディオス・ソープに変身して星団を自由に飛び回る
- ・作者は「神様」と定義する

## ZAP

- ・ミラージュ騎士団の GTM 「ツアラトウストラ・アプタープリンガー・パンツァーカン  
プフロボーター」
- ・ファイブスター物語での最強のロボットだが滅多に出てこない

# 映画『花の詩女』ブルーレイはいつの日か

2012年に公開された映画『花の詩女 ゴシックメード』はブルーレイ等のパッケージメディアとしてリリースされない。この映画の監督である永野護は繰り返し何度もそう言っている。未見の方に説明しておくが、この『花の詩女』とは永野の漫画、ファイブスター物語の劇場アニメ映画だ。永野の初監督作品となる。

パッケージメディアとして発売しない理由について永野は、とにかく劇場で見て欲しいからだと繰り返す。幸いにも、過去の映画の再上映を企画するドリパスのお陰で、この映画はこれまでに何度も上映されている。

ドリパスの上映企画は、まず、上映館と日時が発表され、見たい者がチケットを予約。その予約が一定数を越えた時点で上映決定となる。クラウドファンディングに似た仕組みだ。これまでに何度も上映企画が成立しており、もう一度見たいという熱心なファンによって現在でも上映リクエストが行われている。だから決してこの映画は「コケた」訳ではない。にも関わらず、監督の永野は、この傑作をブルーレイとして売り出すつもりが全く無いと言う。なお、1989年に公開されたファイブスター物語の最初の劇場アニメに永野は関わっていない。これには複雑な理由があり、ここでは割愛するが、この最初の映画はブルーレイとして発売されている。

月刊ニュータイプ2018年11月号に掲載されたファイブスター物語の1ページ目(いわゆる「扉」)には、当時ドリパスで行われた全国上映企画に関連して『花の詩女』の音響や効果音について、永野自身による、こだわりのエピソードが書かれていた。ハリウッドレベルの緻密な仕事だったと永野は振り返っている。実際に劇場でこの映画を見たぼくは、なるほど、あの怒涛の音響はこうして出来上がったのだと驚いた。そして、以前からぼくが考えていた、ブルーレイとして出さないのなら、せめてドラマCD(まだビデオデッキが普及していない大昔にはアニメ作品の音声のみのレコードが発売されていた)で出して欲しいという願いも、叶うことはないのだろうと悟った。あの音は優れた劇場であってこそなのだろうと。

ぼくの考えでは、ファイブスター物語の新作アニメ映画を作る際に、その資金集めのために『花の詩女』ブルーレイは発売される。『花の詩女』ブルーレイを出さないのは、リメイクを行わないと駄目だと永野が考えているからだ、ぼくは考えている。そのためにはスタッフを再結集しないとイケないのだが、それは簡単には出来ない。再度アニメスタジオ(映画制作当時の作画スタッフチーム)を組まなければならないし、当然、ファイブスター物語の漫画連載は止まるだろう。だから、それは次回作の劇場アニメ映画制作まで待っているのだろうと、ぼくは考えたのだ。なお次回作は3159(年表に書かれている星団暦3159年のエピソード)だと思う。これはインタビュー等で永野がそれとなく発言していたからだ。しかし、実際に映画を作るという話は、まだ無い。いつか作りたいという願

## 13 卷以降の洗練

ファイブスター物語は分かりづらい漫画だ。これは何度も指摘されてきた。膨大な専門用語、そして、何を意味するのか分からない謎の台詞が多い。登場する人物が誰なのか分からないことも珍しくない。それらは、伏線と呼ばれるものでもあり、後に分かることだ。

それ以前に、この漫画は、漫画として読みづらいものだった。作者の永野護はアニメのデザイナー。仕事として漫画を描いたことは無かった。永野は月刊ニュータイプ創刊号から漫画を描き始めた。1985年のことだ。ロックバンドが活躍する近未来の話だった。この漫画は一年間連載された。そして1986年からファイブスター物語の連載が開始。初期のファイブスター物語はまだ漫画として「こなれて」いなかった。連載当初から面白かったけれど、永野が漫画を描くことに慣れてきて、次第に読みやすくなったのは確かだ。

ファイブスター物語の連載が開始される前、月刊ニュータイプが創刊される直前に角川書店から刊行された重戦機エルガイムの本に掲載された、永野護の描き下ろし数点からなる絵物語。当時はエルガイムの設定に習い、主役の男はポセイドルと呼ばれていた。アマテラスのことだ。英文の説明が添えられた、その絵物語には「ファイブスター物語」というタイトルが付けられていた。もちろん、これは、後に連載が始まるファイブスター物語の原型となっているものだ。この時点で、ファイブスター物語ではおなじみの年表も公開されていた。当時の出来事は、月刊ニュータイプにて永野護の担当編集者でもあった井上伸一郎の著書『マモルマニア』に詳しい。

ファイブスター物語の原点。これまでに見たことのない、絵物語だった。エルガイム世界の延長であるはずなのに、その世界観は、アニメのエルガイムを含むそれまでのロボットアニメと異なるものだと感じられた。一枚の絵に、とてつもなく奥行きがある。遠近法のことでは無い。ここに描かれたロボットには、時代背景や歴史、一言では語り尽くせない物語が存在している。そのように感じさせる奥行きのことだ。

ぼくにとってファイブスター物語の魅力とは、永野護が描く一枚のアクリル画やデザイン画。その絵の持つ絶大なインパクトのことだった。ファイブスター物語では、連載に先行するかたちでロボットやキャラクターのデザイン画が公開されることが多い。当時のぼくの感覚では、その絵から想像することが楽しみ、醍醐味でもあった。もちろん、漫画連載がそれに劣るということは無い。

想像する楽しみがある。今ぼくが読んでいるファイブスター物語、そのワンシーンとは、数千年の長い歴史のなかの、ほんの数日、ほんの数年でしかない。この一コマ、その台詞には秘密があり、それは時が来たら分かる。だから、ファイブスター物語の分かりづらさとは、すなわち、面白さだ。

自らが年表で決めた事柄さえ守っていれば、いつ、何を描いても良いと言うこと。突然に過去や未来のエピソードが描かれたりもした（それは13巻以降でも変わらない）。